サルー
Salud!★ 71 号
2019 年３月１日

●キューバ友好円卓会議　通信
e-mail：cuba.entaku.0803@gmail.com
FAX　03－3415－9292　　https://cubaentaku.jpn.org/
〒157-0073　東京都世田谷区砧 8-15-14-101

目次　■2018 年９月 22 日キューバ友好フォーラム報告…２～５　■キューバの呪い⑥…６～７　■キューバ　ナショナルデー・レセプションでのカルロス・ペレイラ駐日キューバ大使の挨拶…７　■キューバ右往左往⑥（最終回）…８～９　■2019 国際ブリガーダの案内…10　■ハバナ竜巻被害に支援を…10　■2018 年キューバ円卓会議収支報告…10

2019 キューバ友好フォーラム

3月23日（土）

13:30～16:30　開場 13:00

会場　日本記者クラブ大会議室
TEL 03－3503－2721
東京都千代田区内幸町２－２－１
日本プレスセンター９階
東京メトロ千代田線・日比谷線「霞ヶ関駅」Ｃ出口、丸ノ内線「霞ヶ関駅」Ｂ２出口、都営三田線「内幸町駅」Ａ７出口、ＪＲ「新橋駅」日比谷口（ＳＬ広場側出口）

参加費　1000 円（会員 500 円）
事前申し込みは必要ありません

革命から60年、キューバ 新時代へ

今年は 2019 年。キューバにとって画期的な年になります。その理由は、まず、革命から 60 年という記念すべき年にあたるからです。第２の理由は新しい憲法が公布される年だからです。

国会で発議された新憲法草案は国民的な討議に付され、この２月 24 日の国民投票で圧倒的多数の賛成で承認されました。これに伴い、新憲法は４月 19 日に公布されます。キューバで憲法が制定されたのは 1976 年ですが、今度の新憲法はそれを全面的に改正したものです。したがって、キューバは文字通り「新時代」を迎えることになります。

これに先立ち、昨年２月には革命を知らない世代のミゲル・ディアスカネル氏が国家評議会議長(元首)に就任しています。加えて、2015 年に米国と 54 年ぶりに国交を回復したこともあって、キューバは急速に大きく変貌しつつあります。

フォーラムでは、駐日キューバ大使館のクラウディオ・モンソンさんに新憲法の内容を解説していただき、さらに、この１年間キューバに滞在して３月初めに帰国される早稲田大学の岩村健二郎さんに、キューバの最新事情を語っていただきます。

講演１　キューバ憲法改正のプロセス

クラウディオ・モンソンさん　駐日キューバ大使館二等書記官
ハバナ出身／34 歳／2009 年にハバナ大学卒業後、ＩＳＲＩ(外務省研修所)に入学、12 年から外務省のアジア局で日本担当、16 年から１年間日本に留学後、17 年から駐日キューバ大使館に勤務

講演２　キューバに住んで 日本の銀行口座が凍結された話

岩村健二郎さん　早稲田大学法学部（キューバの歴史学が専門）
共著　『キューバを知るための 52 章』後藤政子／樋口聡、岩村健二郎（明石書店 2002 年 12 月）
『世界地理講座：第 14 巻ラテンアメリカ』坂井正人／鈴木紀／松本栄次／岩村健二郎（朝倉書店 2007 年６月）
Grupo Chevere や Salsa Swingoza でキューバ音楽やサルサを歌っている。

みなさんはキューバが好きですか？ 僕も大好きです。でも、好きすぎてなんでこんなに好きなんだろう、どうやってキューバと付き合っていこう、と思い悩んでしまったところから、僕の長い旅は始まりました。最初に行ったのは 1989 年、そこでそのまま「身を捧げ」て誰かクバーナと結婚でもしていれば、僕もキューバの一部になれていたかもしれません。でもそれは嫌でした（クバーナが嫌だったわけではありません）。そこから 30 年たって、やっと自分の力で、好きなように、キューバに「住む」ことができました。１年、家族で暮らしたあれこれをお話しします。

カストロからディアスカネルへ　どうなる キューバの新時代

録音の書き起し　井ノ上節子　　フォーラム写真　安田 清

講演１　若者に魅力ある社会に脱皮できるか

伊高浩昭さん　ジャーナリスト

いだか・ひろあき。1943 年東京生まれ。立教大学ラテンアメリカ研究所学外所員、元共同通信記者。67 年から半世紀余りラ米情勢を取材。キューバ関係の著書に『キューバ変貌』『ラ米取材帖』『チェ・ゲバラ　旅、キューバ革命、ボリビア』など、訳書に『フィデル・カストロ　みずから語る革命家人生』『フィデル・カストロ後のキューバ』『カストロ家の真実』など。

私が駆け出し記者だった 1968 年、フィデル・カストロは、僅かに残っていた中小企業５万５千を国有化、ブエナビスタ・ソシアルクラブのライブハウスも閉鎖された。商店のショーウインドウには小学生の絵が展示され、ハバナは、火が消えたようになった。農村への優遇政策に対し、都市は冷遇され、家のペンキは塗装を施されず、壁の修理もなされなかった。ハバナは、「化粧していない美人」と評された。

世代交代が難題

それから 50 年、沢山の日本人、世界の人がキューバへ行く。そして、感銘を受ける。「時間が止まったようだ。人間が一昔前のよう。古い時代のものが残っている。心が穏やかになる」、「酒も芸術も音楽も踊りもいい。人は優しく笑う」と言う。

しかしキューバ人自身は本当に素晴らしいと思っていないのではないか？ 彼らが外国人に笑顔を見せるのは、本心からか？ 富裕な層がいる一方で、月収 10 ドルの人が 20～25%もいる。アンバランスな社会になってしまった。どうしたらいいのか？　それが今日のテーマです。

時が止まったように感じられるのは何故だろうか。変わらない存在がキューバ共産党。厳然とあり「革命体制」を支配している。キューバ憲法の規定上、最上位にある。キューバは、今、この憲法の全面改定過程にある。

現代キューバの大きな問題は、経済問題もあるが世代交代だ。革命を知らない世代が国民の４分の３なのに、80 代になった革命戦争の立役者たちが最上層を占めるのでは、体制がうまくいくはずはない。フィデルが重病で退き、ラウールが体制変革への入り口に立った。2018 年４月、30 歳若いミゲル・ディアスカネルが国家評議会議長になり、共産党第１書記ラウールが後ろ盾になって、憲法改正へと進んだ。

キューバは、経済の行き詰まりに世代交代の荒波が押し寄せ、トランプ米政権登場、同盟国ベネズエラの苦境にも直面。極めて厳しい状況に置かれている。

変革に不可欠な新憲法

ラウールの第１書記の任期は 21 年４月に終わる。ラウールは、胡錦涛前政権までの中国に倣って要職の任期は１期５年、１人２期までとした。この２年が改革路線をさらに固める好機だ。時代にそぐわなくなった 1976 年制定の憲法を変えないと国が変わらないと、ラウール、ディアスカネルら指導部は考えている。

権力を手離さない兄の下で、大番頭のような立場にあった弟ラウールは、フィデル政治の何が良くて何が悪かったかを分かっていた。90 年代、経済のどん底期に、カルロス・ラヘが市場経済を取り入れて乗り切ったが、彼の上にいたのがラウールだった。ラウール路線とフィデル路線は対立していた。両派の権力闘争に勝ったのはラウールだった。

ラルールが 90 年代から若手指導者を育成していたが、競争を生き延びたのがディアスカネルだった。個人的野心がなく米国と通じることもないと判断され、政治局員に抜擢

2016年６月２日、東京・虎ノ門のホテルオークラで開催されたディアスカネル氏来日記念パーティー。左写真中央がディアスカネル氏、左端はマルコス・ロドリゲス前駐日キューバ大使。右写真は、キューバの歌を披露したディアスカネル氏（右）　写真：岩垂 弘

された。16年半ば来日し、政財界と会い、広島も視察した。ホテルオークラでのレセプションでバンドを背に歌を歌い（写真右上）、ボンゴをたたき、サルサも踊った。新しいキューバ人指導者が出てきたという感じだった。

19年２月24日に国民投票

2016年の第７回共産党大会で、ラウールは正式に市場経済を導入した。ソ連崩壊後の90年代、市場メカニズムは実験的に導入されていたが、2019年２月24日の国民投票で承認されるはずの新憲法に公式に位置づけられる。

従来の憲法はソ連の指導の下に起草、制定され、81年に小さな改正、92年にかなりの改正があり、2002年には特にフィデルの意向で「社会主義体制は変えてはならない」という条項が加えられた。

80年代にゴルバチョフ書記長がソ連を変革しようとしていた時期、フィデルは、内なる締め付けを強化し、ゴルバチョフ路線寄りと見なしたオチョア中将ら高官４人を銃殺刑に処した。ソ連消滅で90年代前半、経済はどん底に陥った。この時期の改憲では、プロレタリア独裁主義や「共産党の民主集中」を削除した。信仰の自由、同性愛は認められた。02年の改憲は、国民投票ではなく全国的な国民の大デモ行進で承認した。その先頭でフィデルは行進した。

しかし進行中の改憲は大掛かりなもので、新憲法制定という方がふさわしい。18年４月のディアスカネル政権発足後、憲法起草グループが草案を策定、人民権力全国会議（国会）で７月、第１次草案が承認された。８月から11月にかけて16歳以上800万人の有権者が全国各地で会合を開き、第１次草案を叩き台にして討論を展開。在外キュ―バ人社会でも実施された。

在日キューバ人社会は小さいため会合せず、インターネットで討論や意思表示がなされた。目玉の一つは「同性婚を認める」条項。ラウールの娘マリエーラ議員が運動して草案に盛り込んだ。同性婚を認めるのは、キューバのような「お堅い国」では超新しく見える。「新しさ」を示す政治的狙いが窺える。民間の資産の所有形態も制限付きで、個人、法人の財産権という形で認める。

大統領と首相を置く

柱は、元首として大統領の地位を設けること。605人の国会議員の中から選ぶ。なぜ直接選挙にしないのかという議論がある。このような意見を言えるようになったのが以前とは違い、面白い。政府首班としての首相も設けられる。首相は、大統領の推挙に基づき国会が決定する。今の国家評議会は国会議員31人で構成される幹部会であり、立法府の中に置かれた行政の最高指導機関だ。現憲法では、国家評議会議長が国家元首で、国会議長は別にいる。新憲法下では、国会議長が国家評議会議長を兼ねる。立法府だけとなる。

だが一方に共産党がある。新憲法での共産党の位置付けが問題で、最大の関心を集めてきた。党が「国家の最高指導機関」ということと、「キューバの主権者はキューバ国民」ということは矛盾し、いったいどちらに主権があるのか、と大論争になっている。主権在民が、一部エリート国民が党員の「主権在党」ではないかと。条文でどう調整されるかだ。大統領、首相、国会、司法など全機構の上に共産党が漬け物石のようにあるのは不自然ではないか、との疑問も多い。

「社会主義は不変」という条文は変わらない。「共産主義社会を目指す」という文言は消えた（後に復活）。間接選挙で選ばれる大統領と共産党第１書記が同一人物なのか否かという問題もある。「共産党は党員だけのエリート政党で国民全員の党になっていない」という問題提起もあり、興味深い。

自由求める若者

問題は若者だ。在外キューバ人も世代交代している。何十万人もが外国で働き、年30億ドルもの送金をしている。2013年に移民法が改正され、出入国が大幅に自由になった。若者は電子機器で情報を得ているが、物質的豊かさが桁外れに異なる外界からの情報に敏感で、そんな国に向け出てゆく。若者は新しい出稼ぎ者の役割を果たす。

キューバの若者にとって通常のエリートコースは、共産党青年部に入り、次に党員となって、外交官や政治家になること。政治的無関心になった者には国内での選択肢はなく、出国となる。黒人国民への差別は解消されていないが、日本にも来ていて、ブラジル料理店などで働いている。

移民法改正後、若者は出国への情熱が熱く、長い人生を自由に生きたいと構想する。そんな不満派の若者層への政府の対応が鈍い。若者にインタビューすると、「経済的発

展や技術的発展が早く来るのを望んでいる」、「スマホが欲しい」、「決して反社会主義、反革命ではなく、自分なりの希望を持って生きたい」などと返答してくる。 若者が社会に関心が無くなってしまったのは、政治的選択肢が無いからと言える。

国民は、月に 30 ドル位の収入が多いが、月 400 ドルから１万ドルの富裕層が１％程度いる。葉巻農家、野菜・米作農家、養豚業者、不動産業者、レストラン経営者などが入る。誰もが「平等」とか「社会主義的正義」が信じられなくなっている。貧富格差への反発が、特に貧しい人、黒人層から出ている。これは放置できない問題だ。

政府が税を高くして自営業者を規制しようとすると、創意工夫上マイナスだと議論が起こる。政府は、税金は社会福祉に還元していると主張する。若者は、変化の歩みが遅いと感じており、待っていられないと出国する。「国際主義者」として第三世界で医療活動などの支援活動に参加するのも一法だ。帰国しない「国際主義者」もかなりいる。

革命にまつわる行事は、丁寧に毎日のようにやっている。政府機関紙のグランマは、読みたくないという若者のノンポリ化を助長している。

憲法は、ホセ・マルティの思想に基づくとするが、続いてホセ・マルティ主義、フィデル・カストロ主義と入れる。カストロの業績は、東西冷戦時代に大きな変化の力学を与えたとかいうが、経済建設は失敗している。カストロ主義は、何の意義があるのかと疑問に思う。

続く茨の道

権力が分割されてゆくと、共産党の影響力はどうなるか。イディオロギー機関として国政に関与するのは疑いない。19 年に制定される新憲法で私有財産制、市場経済が認められ、外資導入にも熱が入るだろうが、民族資本はどこまで投資できるようになるのか。ラウールは、自分の眼の黒いうちに経済立て直ししたいところだろうが、かなり難しい。キューバは今後も茨の道をこつこつ努力し、歩んでいくだろう。

50 年前のキューバでは、ホテルの部屋でチップ１ドルを枕の下に置いておくと、「忘れ物」と紙に書いて、夕方返してくれた。今は、みんなが米ドルを欲しがる。その頃のコッペリアは、若者にとっては入るまでが楽しかった。行列に並んでいたある娘がクリップの首飾りをしていたのを見つけた。私がそれを見つめると、「素敵でしょ」と笑顔を見せた。私は胸を打たれ、感激してシャッターを切った。

キューバの時間は止まっているのか、それとも止められているのか。私たち外国人はどうすべきか。東西冷戦下の厳しい時代、当時の世界の若者や壮年層は、キューバに代理革命を見ていた。

時代が変わった。キューバ人を理解し、語り合い、旅行して外貨を落とす。愛すべき人々に胸襟を開いていく。少なくとも個人としての私はそうしたい。

ジャーナリストとしては、ある国や物事の「すべてがいい」、「すべてが悪い」というのはなく、「ここはいい、ここはよくない」と率直に書き発言したい。すべての対象に対し、そういう作風を維持したい。

講演２　**サルサとスペイン語を習いにハバナへ**

山田砂波麗さん　会社員

やまだ・さはら。1986 年生まれ。幼少時より、親の都合で、アジア、アフリカ、中東などリスキーなところへ引き回され、海外渡航歴多数。高校・大学でタイのチェンマイやアメリカのカンザスへ留学。卒業後は電気機械会社で営業・通訳に従事。
昨年、ホーチミンに居住。

１泊 2500 円の民宿に滞在

キューバに２度行った母の勧めでキューバへ。行くまでスペイン語もサルサも習ったことはない。現地では、身振りを交えたコミュニケーションになった。

３月、28 日間の旅だった。夜に到着。危険は感じず、両替後そのままタクシーで民宿へ。カサ・デルタに滞在した。ここは、３部屋を貸し出していた。1 泊 25 セウス（2500 円）。 オーナーはチャチとアルベルト。チャチの母親デルタとチャチの息子フーリオが家族だ。お手伝いもいる。

朝食は沢山のフルーツ、フルーツスムージーと、パン、コーヒー。 夕食も作ってくれた。レストランに行ったこともあったが、チャチの料理が一番美味しかった。

カサにはインターネットが無く、カードを買って Wi-Fi スポットに行くと、いつも人で溢れかえっていた。ファブリカ・デ・アルテという展示施設へ行った。クラブ、バーも付いている。現代アート作品を展示していたが、どれもカッコ良く面白いものばかり。キューバ人、外国人でごった返している。来場者は皆おしゃれで、ここはキューバ？と思うほどだった。

ハバナ散策。案内するからと、大学生らしき人が寄ってきた。ここはチェ・ゲバラが住んでいた寮と。レストランに行って、いつのまにか飲み物が注文され、２人分払わされたあと、バイトがあるからと、彼は去って行ってしまった。道に迷ってしまった。少年がついてきた。気まずいので、アイスクリームのコッペリアはこっち？　と聞くと案内してくれたが、1 セウスくれと。持ってけーと渡し、カサへ帰ってふて寝した。

カサのファミリー
左からアルベルト、デルタ、チャチ

国籍も年齢も多彩！ ハバナ大学スペイン語クラス

ハバナ大学 スペイン語講座の生徒と先生

ハバナ大学のスペイン語クラスは、９：30 から 12：30 までの３時間。クラス分けテストで初級クラスへ。先生はアリーナ。早口でいつもイライラしていてチョークが折れた。声が大きく短気だが、最後には好きになっていた。宿題もたくさん出た。10 人の４割は中国人で、カナダ、スウエーデン、ナイジェリア、韓国などからも。日本女性と出会った。保健師で定年後に来たとのこと。10 年前にも来たことがあるという。スウエーデン男性は 29 歳の医者の卵。カナダ人男性は 58 歳。技術者でカメラマン、キューバは３度目と。韓国人はキューバで６年間勉強して、医者の国際免許を取るそうだ。皆、歴史と政治に詳しい。彼らを通していろいろな人と出会った。沢山の中国人や韓国人と知り合ったが、真面目で人懐こく可愛い人たちだった。

プラザ・カルロスというデパートに行った。お酒、缶詰はあるが、肉は鶏肉ばかり、電化製品はあっても種類がない。経済制裁による品不足を実感した。チャチは、毎日、欲しい物が手に入らない、何かあれば買っておかないと、次いつ入るか分からないと愚痴っていた。洋服や化粧品が見つからず、オシャレが大変そうと思ったが、街には、気合いの入ったオシャレをした、素敵な女性が多い。スペイン語クラスの韓国人の友人の話では、キューバ人女性は初対面でも、結婚して韓国へ連れて行ってと言うそうだ。

サルサについては、意気込みはあったが……。ダンスレベルが高い。キューバ人は、音楽があるとすぐ踊る。南米は、基本的にダンス上手だが、あるドミニカ女性によれば、キューバ人は別格だそうだ。先生は、自分をダンスクイーンと思って踊れというが、隅っこで指をくわえて眺めているだけ。次回のリベンジが目標となった。

病院はタダだが、良い医者にかかるには……

カサでサルサのレッスンをしていたら、警察が来た。威圧的な彼に、ツーリストカードを提示した。抜き打ち検査で、問題があると 10 万円位徴収されるところだった。

４月のキューバは暑く、街は車で空気が悪い。歩いているとおじさんが、チノと声をかけてくる。こんなに声をかけられることは無かったし、チカ　リンダとも言われ、嬉しくない訳はない。 サンタマリアビーチへ、友達と旧市街から１時間位、激混みのバスに乗って行った。海は綺麗でビーチが広くテンションが上がった。

チャチの話。今は 56 歳。12～18 歳頃、学校の寮生活をした。週末ごとに郊外でのじゃが芋収穫やたばこ農園に駆り出されたせいで、チャチもアルベルトも体を悪くしたという。離婚経験あり。前夫は養育費を払わなかった。母親デルタは、革命前のやり方が抜けずお金が入るとすぐ使ってしまう。それが悩み。デルタはスペイン系キューバ人で、家を何軒も持っていたが、没収された。今もおしゃれでマニキュアを欠かさない。カサ経営は大変だ。毎月 200 セウス（２万円）国へ払う。年末には収入の 10%を払わなければならない。

病院はタダだが、良い医者にかかるには、お礼の品を準備しなければならない。最近、生活のためドラッグや売春が増えているという。チャチは、面倒見がいいが、話が長い。チャチの誕生日パーティーがあった。高級パティスリーで 3500 円のケーキを買って、お花と一緒にプレゼントし、スペイン語の手紙を読むと、チャチは号泣した。

キューバへの旅は、もの凄く面白かった。ハバナの人たちは、魅力的で親切。

行きつけのバーにあった言葉。

No tenemos Wi-Fi. Conversen entre ustedes.
（Wi-Fi はありません。お喋りを楽しんで）

徹夜でパッキングして、朝４時の飛行機に。28 日間、飛行機代込みで 38 万円で収まった。

連載 ★ 渡航歴 30 回、滞在日数約２年

白根 全の キューバの 呪い ⑥

ヘミングウェイが残した キューバ暮らし 22 年の気配……

「なんて趣味の悪いヤツだっ！」

ハバナ郊外のサン・フランシスコ・デ・パウラに邸宅を構えるより前、パパことアーネスト・ヘミングウェイの定宿だったのは、旧市街の繁華街オビスポ通りの角に建つホテル・アンボス・ムンドスだった。５階の東北側の角部屋がお気に入りだったが、案内してくれたダニエルによれば、近くに酒場が多すぎて、仕事をするより飲んでいる方が多かったという。行きつけのなかでも、とりわけお気に入りの一軒はカテドラル脇の小道に面したボデギータ・デル・メディオで、バーカウンター前の酒瓶棚には額装されたパパのサインが残されている。いわく「わたしのモヒートはボデギータ、ダイキリならばフロリディータ」。ちなみに、その左横に掛けられている額は、「サンチャゴの悲劇」と呼ばれたピノチェト将軍による軍事クーデターに斃れた、チリ共和国大統領サルバドール・アジェンデの直筆サインだ。オビスポ通りを戻って、フロリディータにも寄り道してみる。バーカウンターの左奥がパパの指定席。この店がフローズン・ダイキリ発祥の地とされ、世界中のバーマンの間では聖地と崇められている。

発狂しそうなほど混みあい、泣きたくなるほど遅い年代物のバスで、ダニエルの住むサンフランシスコ・デ・パウラへと向かった。奥さんのマリアテレサと５歳の娘アナマリアの３人家族だ。ダニエルは曽祖父の代からの地元民で、少年時代すでに主の去った邸宅庭のマンゴーをおやつ代わりに育ったという。なるほど、詳しい訳だ。1954 年にノーベル文学賞受賞の知らせが届いたとき、近所の住民と一緒に祖父と父親は邸宅の祝賀パーティーにも参加したという。その受賞メダルはパパがキューバを去る際に、サンティアゴ・デ・クーバ郊外のコブレ聖母教会に寄贈された。

排気ガスが車内に逆流し、暑さも加わって苦行に近い。ようやくたどり着いたフィンカ・ビヒア（望楼農場）のうっそうと茂る森と丘の麓、ハリケーンで半分壊されたように見えるダニエルの自宅。外国人と親しくしているのを見られると隣近所のＣＤＲ（革命防衛委員会）がうるさいからと、押し込まれるように家の中に通された。家具がほとんどないがらんどうの二間。タンス代わりに屋根の梁に掛けられたハンガーから、ブルーのシャツを手渡される。意味不明、何なのだろう。とにかく、日が傾く前にあの大邸宅の写真を撮影せねば。時間がかかりそうだし、空模様も気になる。また今日も午後お約束のスコールが来そうだ。

パパの死後キューバ革命政権に遺贈されたフィンカ・ビヒアは、森にさえぎられて入り口から屋敷が見えないほどの大邸宅だ。こんな環境に暮らしていればオレだってノーベル文学賞くらい、と思わずつぶやきたくなるような理想的な暮らしぶりが偲ばれる。大王椰子の茂る丘と谷、緑に縁どられたハバナの市街が遠望でき、愛艇ピラール号を係留してある漁村コヒマルも近い。１階建て、白亜の邸内には立ち入れないが、リビングから寝室やバスルームまで、大きく開け放たれた窓から内部を見学することができる。いかにもマッチョを象徴するように壁に飾られた動物のはく製首は、実際に彼自身がアフリカのサファリで射止めたトロフィーだ。後日これらを目にしたガボことガブリエル・ガルシア・マルケスはただ一言、「なんて趣味の悪いヤツだっ！」と吐き捨てたそうな。個人的にはバッファローやインパラの首よりも、やはり本棚が気になる。蔵書は 9000 冊を越え、壁の隙間もないほどに家中に本棚が繁殖しているが、数の

割に圧迫感がないのは開放的な佇まいのせいだろうか。リビングの本棚の上に飾られたペルーのチムー文化時代の、1000 年以上も昔の黒色土器に目を引かれる。

行きつけのバーで飲んだくれているか、ピラール号でカジキマグロを狙うとき以外、パパはキューバで暮らした 22 年間の大半をこの邸宅で過ごした。午前中早い時間帯に、立ったままタイプライターを叩いて執筆に専念する。アフリカで遭遇した２度の飛行機墜落事故による後遺症か、椅子に座って仕事をすることはほとんどなかった。執筆が一段落すると、その後は長時間プールの中かプールサイドで酒杯を手に過ごした。昼食前からその日最初の一杯がスタート、ハイボールかトムコリンズを２杯。日によってはウイスキー・ソーダかオン・ザ・ロック。食事時は欠かさずワイン。中国人のアル中コック、ラモンが腕を振るう料理がことの外お気に入りだったという。

邸宅の周囲の窓から、急ぎ足でアングルを変えつつ撮影に取り掛かる。空模様が気になっていたが、遠く望むハバナ市街の上空を覆う重い雲は風に流されることはなさそうだ。望楼に登ってしばし遠景を撮影してから、迷子になりそうなほど広大な庭に足を延ばした。パパが長い午後を過ごしたプールサイドには、愛犬とネコの墓標が並び、その奥にはこの邸宅とフロリディータの次に居心地のいい空間であった愛艇ピラール号が保存されている。男の夢と情熱がすべて詰め込まれた空間、パパは思うがままに筆を走らせ、カジキマグロと闘い、美女を侍らせて酒杯を干した。もはや、付け加えるべきことは何もなかっただろう。　　（続く）

しらね　ぜん

日本で唯一、世界中でも２人しかいないカーニバル評論家、ラテン系写真家。東京出身。青山学院大学卒。仕事（撮影取材調査渉外観察記録編集企画制作など）その他（探検冒険踏破潜入縦断横断登攀釣魚沈没など）さまざまな理由で現地に入り浸っている。人類 400 万年の旅グレートジャーニーのサポート、コーディネートも担当。これまでに訪れた国は、６大陸、150 カ国超。ラテンアメリカとカリブ海域の主なカーニバルはすべて制覇。
定点観測と路上観察を続けているキューバは、1989 年以来、30 回目の訪問をマークした。

駐日キューバ大使館は１月９日、東京・虎ノ門のホテルオークラにて、日本の政官界、経済界、文化界、スポーツ界、友好団体の関係者、各国外交官ら約 350 人を招き、革命 60 周年記念「キューバ　ナショナルデー・レセプション」を開催。以下は、そのときのカルロス・ペレイラ駐日キューバ大使の挨拶です。

1959 年１月１日、革命勝利により、フィデル・カストロの指導のもと、最終的な真の独立をめざすキューバ国民の１世紀を超える闘いが終結を迎えました。それはキューバへの米国の絶対的支配が確立してから丁度 60 年後のことでした。その時以来今日まで、全ての人による全ての人のための、全ての人の社会を建設するという固い決意が貫かれています。

４世代のキューバ人は、自らの国を建設する決意の高い代償として過去 60 年間に直面せざるを得なかった様々な形の脅迫と攻撃、巨大な困難に対し、無数の英雄的抵抗のページを記して来ました。我々に連帯的支援を差し伸べ、我々を信じ、少なくない不利益を被りながらも支援を続けてくれている世界の全ての友人に、キューバは深く感謝しています。

完全な独立、勝利の抵抗、社会正義、自己犠牲、国際主義の象徴としての模範こそが、キューバ革命と英雄的国民が記した歴史の賜物であると言えます。ディアスカネル議長が述べているように、キューバの国際面での行動を導くのは常に、国家の自決権と主権への尊重、他の国民の正しい大義への支援、相違を超えた平和共存、そして、全ての核兵器廃絶を含む人類が直面する重大な課題を解決するための世界的協力への貢献であり続けます。

昨年は日本人キューバ移住 120 周年を記念し、我が国社会の様々な分野での日本人移民の貴重な貢献に敬意を表しました。キューバ社会には、自分の未来を託す場所として我が国を選んだ最初の日本人移民の足跡が残されています。
同様に、満足をもって言明できるのは、昨年は様々な分野で、互恵のもと、共有する関心と課題を活用しつつ、両国関係を深化させることができたことです。特筆できるのは、ほんの数例あげるだけでも、何件ものハイレベル代表団の交換、ＪＩＣＡハバナ事務所開設、数件の経済協力プロジェクトの開始、両国貿易 20％増大、両国間中期経済アジェンダの調印、そして、投資相互促進保護協定の交渉が数日前に開始されたことなどです。
今年の 12 月 21 日は、両国外交関係樹立 90 周年に当たり、相互尊重・信頼を通じて両国の友好親善をさらに強化して行くための又とない機会となるでしょう。

また今年は、キューバ新憲法が国民投票を経て発布される年でもあります。憲法草案はこの数カ月間、何百万人ものキューバ市民の討議にかけられたものです。それはキューバ革命の民主的な性格を明確に証拠づけるもので、国の生き方を決める主要な決定事項が、国の内外の全てのキューバ人の意見に支えられています。

この機会を通じて、日本との関係を強化するという私達の決意を新たにいたします。また、ますます社会主義的、民主的で、豊かで持続的な社会を建設するというキューバ国民の決意を、誇りと熱意をもって再確認いたします。去る１月１日、革命 60 周年記念集会でラウル・カストロ前議長が述べたように、「明日を想像する時、達成された事業は私達に尊厳のある豊かな祖国の未来を展望させてくれる」ものです。

連載

サンクティ・スピリトゥスで孤軍奮闘

松尾 光のキューバ右往左往 ⑥

最終章－日本語講座継続に希望を託す

2019 年３月 27 日にキューバでの活動を終わる。これ以上、私の活動は許されないため、予定より半年早く終わる。残念だが、キューバ日本語教育の先駆者である父の介護問題が緊急を要し、早く帰れてほっとした面もある。

「教育とは教師の自己満足であってはならず人を育てること」なので、３人のキューバ人教師を育てたことは画期的な成果」と日本ではねぎらいの評価を受けるが、個人的な心残りの思いも膨らむ。

３年前できたことが、昨年すべて振り出しになりサンクティスピリトゥスの管理者は、私の教育活動継続に対して何もできなかった。

「外国人によるプロジェクトはキューバ政府に対して、個人ではなくなんらかの機関や団体の後ろ盾があることを伝え、進めなければならない」との原則が守られ、地方都市は産業育成や教育について問題を抱えており、日本語講座を進めるどころではなかったようだ。これがわかるのに１年を要した。

最後３月末まで、日本語教育が根付く努力を、活動が制限されたなかでも、精いっぱい行いたい。

私がいなくても１月から日本語講座を続けるといってくれたアシスタント３名

手前は国際交流基金の専門家

最後の活動

１． ハバナ大の弁論大会（３月２日）への参加。現在６名エントリー。２月はトレーニングにあてる。昨年は大学がバスを用意したが、今年は各自バスを予約。券を買うにはＩＤカードが必要で高校生は大人が買わなければならない。購入に１日並び、すぐ満員になる。バスの券が買えただけで入賞した気分。なんとかならないか。

２． 講座継続の準備。大学生向けと一般市民向けの２つの日本語講座を、私の生徒であるキューバ人日本語教師が立ち上げた。新しい生徒は 30 人ぐらい。私は裏方で支援をする。３人の先生達の熱意に涙なくては直視できないくらい感激している。うまくいってほしい。苦労もあるので、ただ願うだけ。

最後の６カ月の事

８月に日本テレビで日本全国放映された番組を、９月にキューバで見せる

昨年８月に放映された日本テレビの番組の画面

司会は漫才師のタカアンドトシ

お盆の８月 16 日に日本テレビで 19 時から２時間の番組で数分間、私の活動が放映された。短い時間だが生徒たちや街の様子がわかる、いい番組だった。日本でも思わぬ人から好感を持って観たといわれた。学習者たちと、おそらく 10 回以上見た。皆、好感をもって観てくれた。

外国語学校で開講。実らなかった計画

最後の望みとして外国語学校での日本語講座の開講計画があった。街の中心部にあり、校長や幹部の温かい支援があった。実現すれば今迄の心の挫折が、すべて解消すると期待した。トライアルとして教室も使わせてもらった。在キューバ日本国大使館の新しいアシスタントの献身的な協力が実現した。4 か月かけてあと一歩だった。でも最後に街の責任者が講座開講を許可するサインが怖いと言い出し、実現しなかった。

キューバ人が外国へ行くことの難しさ

２月にエルサルバドルで、中米カリブの日本語教育の教師が集まりセミナーが行われた。参加の費用を負担する支援を国際交流基金に申請して承認された。画期的と喜びもつかの間、キューバ人が外国へ行く支援を国際交流基金のような外国の組織から受けることは、制限されており、結局日本の支援金をうけとることをキューバは拒否した。

それでも自費（みんなで出し合う）で行こうと試みた。

パスポート取得し、飛行機の券を購入してホテルの予約をし、主催者の招待状をもらい、いざ出発となったら、ビザが下りず時間切れですべて水の泡。キューバ人の渡航の難しさを思い知る。よほどの強い後押しと数か月前からビザをとる準備をしないと海外へいけない。ビザなしで行けるのはロシア、中国ぐらいだけのよう。お金だけの問題ではない。察するにアメリカへの亡命を防ぐ意味合いがあると思う。

Ｇさんは再婚していた

２人の間に入りあてられた

写真を見てほしい。おととし離婚して悲嘆にくれていたサンタクララの友人Ｇさんと奥さんだ。実は再婚していた。初めて会った時より仲がよさそうだった。理由はわからないがよかった。これがキューバ人と思う。結婚３回は当たり前だ。彼らの家庭環境はとても複雑で、別れた人とＧさんのように仲がいい場合や仲が悪かったりで実の父母、継父母、血のつながりのない兄弟が何人も入り乱れている。生徒や大学の先生の離婚再婚劇を、少子化で子供は少ないながら、この３年で５回ぐらい見た。

生徒や教師たちとは心温まる交流

大変な状況にもかかわらず、ずっと習い続けた生徒たちやキューバ人日本語教師に育った人たち。この人たちとの交流は大きな財産。日本に帰っても連絡を取りあう。

田舎で片言の日本語を話すキューバ人が 20 人はいる。画期的！

キューバは食材不足

キューバは、土地が有効に使われておらず、自給自足はできていないようだ。土地を改良するお金がないことも原因だと思う。買う予算がなければ主食も品薄になり、野菜は作れたときにしか店に出回らない。上は一般家庭の食事。レタスやトマトは、とれたとき年に数か月しか食べられない。信じられないが、いまサンクティスピリトゥスの街では小麦、油、肉が少なく、キューバ人はこれらを買うのがとても大変だ。少ない食材に行列を作って買っている。家族１食で 100 円から 200 円程度で、価格は安いままだが。

学習者の食事に招待される。
精いっぱいのごちそう

旅行者は優先されるので食材の心配は無用だ。

１、２年生たち

３年生、父兄を中心に

子どもたちの課外サークル。日本の歌を歌う

2019 年メーデー国際ブリガーダのご案内

キューバ諸国民友好協会（ＩＣＡＰ）主催の「2019 年メーデー国際ブリガーダ」の募集要項が発表されました。メーデー国際ブリガーダは、世界各国のキューバ友好団体を通じて世界のキューバ好きが集まる国際的なキャンプ合宿です。

キューバ農業体験など国際キャンプ場でのプログラム他、キューバの歴史や文化を訪ねるツアーも多彩に組み込まれており、５月１日には首都ハバナの革命広場で挙行されるメーデー集会にも特別参加いただけ、キューバの魅力をまるごと体験出来るまたとない機会です。申し込み受付は駐日キューバ共和国大使館が取りまとめて行います。

募集要項

■**ブリガーダ開催期間**　2019 年 4 月 22 日～5 月 5 日

■**参加費用**　551 ＣＵＣ（約 60,600 円）をキャンプ場で直接支払います。
全 14 日からなり 1 日 3 回の食事、空港送迎、プログラムに含まれる全活動の移動費が含まれます。

■**渡航費用**　各自で手配をお願い致します。

■**お申し込み方法**　下記の「お申し込み必要事項」を明記の上、駐日キューバ共和国大使館までお申し込みください。
駐日キューバ共和国大使館 TEL: 03-5570-3182,　E-mail: tcultura@ecujapon.jp

【申し込み必要事項】1.氏名（パスポートに表記のもの）　2.性別　3.既婚または未婚　4.生年月日　5.年齢　6.パスポート番号　7.キューバへの入国日と出国日、航空機便名と時刻　8.所属しているキューバとの友好団体の名称（何らかの団体に所属している場合のみ）　9.今回が初めてのご参加でしょうか？　10.食事制限の有無（ベジタリアン等）　11.現在の健康状態について

■**お申し込み締め切り**　2019 年３月 29 日

■**問い合わせ**　日本キューバ友好協会　E-mail: japan-cuba@nifty.com

円卓会議、大使館に表彰される

昨年 12 月２日、東京・麹町の全国教育文化会館で、駐日キューバ大使館の主催で「第５回全国キューバ友好の集い」が開かれました。席上、キューバと日本の友好促進に貢献した団体の表彰があり、キューバ友好円卓会議を含む５団体にカルロス・ペレイラ駐日大使から表彰状が手渡されました。

写真左端 カルロス・ペレイラ大使

ハバナ竜巻被害の支援を！

１月末にハバナで竜巻が発生し、６人の命が失われ、200 人近いけが人が出ました。住宅も 1000 棟以上が損壊し、甚大な被害が出ています。

キューバ友好円卓会議のメールで大使館からの報告と写真をご覧になった方もおられると思います。

皆さまのご支援をよろしくお願いします。大使館へ届けます。払込書の通信欄に**「竜巻被害支援」**と記入をお願いします。

2018 年度キューバ友好円卓会議会計報告

2018 年度繰越金		1,702,719			
入金			支出		
会費	96,000		会場使用料	87,430	
寄付	62,676		講師謝礼	80,000	
参加費	33,500		通信費	89,935	
利息	12		印刷費	26,300	
物品売上	5,800		編集費	20,000	
計	197,988		接待交際費	35,745	
			松尾さん支援	30,000	
			原稿料	20,000	
			振込手数料	786	
			雑費	3,339	
			HP 管理料	10,800	
			ツアー関連	95,123	
			計	499,458	
			2019 年度繰越金		1,401,249

＊2018 年度ツアー会計から 100,000 円を報告会費用として、39,334 円をツアー収益として振り替えました。
＊またツアー会計のうち立替金 46,772 円を損金として処理しました。

訃報

キューバ友好円卓会議事務局長の大賀達雄は本年１月８日、脳腫瘍のため亡くなりました。

大賀は 2003 年９月の円卓会議創設以来のメンバーで、2008 年からは事務局長を務め、円卓会議の活動の発展のために尽力しました。本職が心理療法士だったため、キューバの精神医療に詳しく、それを日本に紹介する上で先駆的な役割を果たしました。

円卓会議事務局人事

大賀事務局長逝去に伴い、杉本茂樹が事務局長に就任しました。